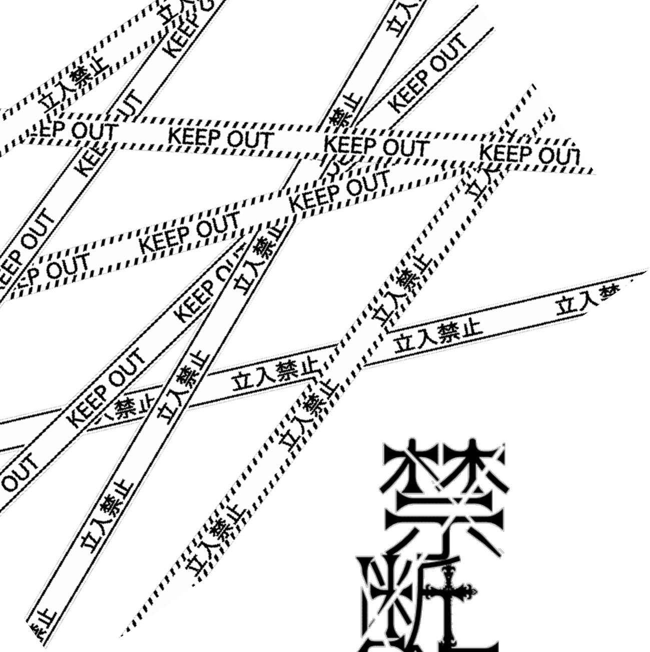
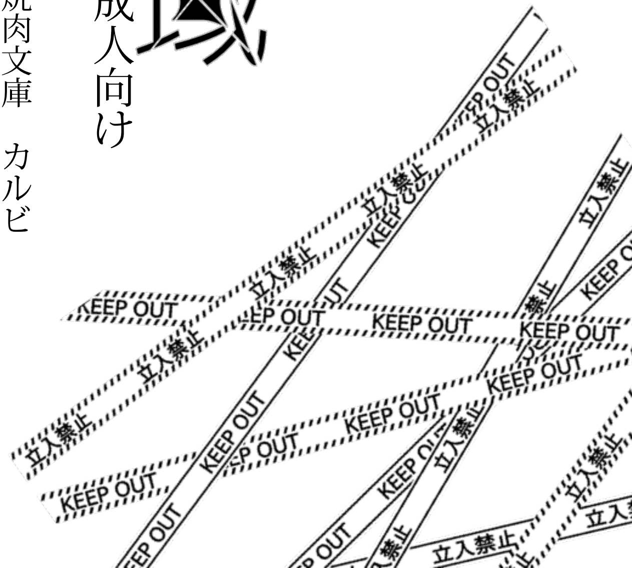



# 禁断領域

成人向け

焼肉文庫　カルビ



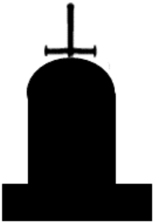
もくじ

穏やかな午後の凌辱……………四
宝玉奴麗天女…………………………二六
魔法少年ハ愛デ敗北スル。……五八
あとがき………………一〇四

この本は成人向けです。未成年の閲覧、購入を禁じます。

この小説の著作権は「サークル:焼肉文庫/作者:カルビにあります」無断での複製、転載、インターネットのアップロードは禁止です。

# 穏やかな午後の凌辱



霊園へ行きたいと頼まれ、御者は馬を走らせた。その霊園は戦争の影響ですっかりヒトが寄り付かなくなった寂しい場所なので、お願いされた時は少し驚いた。
お客は夫婦と思われる異種族同士。
片方は喪服を着た女エルフ。エルフに多い金髪と特徴的な長い耳。帽子のヴェールが顔を隠し素顔までは分からないが、体全体から醸し出される艶やかな色気があり、美人なのだろうと思い込んだ。これで胸が大きかったら好みだったなと御者は内心で思った。
もう片方はオークであった。同じく喪服を着こんでいるが、筋肉で今にも服の釦が弾き飛びそうだ。戦争帰りの兵士だったのか傷を覆った左眼に眼帯をしている。
二人が人気のない墓地に入って行くのを尻目に御者は馬を走らせ、次のお客を迎えにいった。

・・・・・

「それで、リオンのご両親が眠る墓はどこなのだ」
「…………こっちです、ガニアン様」
新緑に囲まれた霊園と足を踏み入れるオークとエルフ。霊園は芝生に埋め込まれた四角い墓石が並んでいた。
オークのガニアンが手にしていたバスケットを適当な木陰に置くと、エルフのリオンが墓の前まで案内する。

オーク族とエルフ族は長い間細々と争い続けてきた。それが数百年前には大きな種族戦争へと急激に発展し、そして五年前にはオーク族の勝利という形で幕を閉じた。以降エルフ達はオークの奴隷として生かされている。

リオンもガニアンの奴隷である。

一五年前、小さな村で家族と仲睦まじく暮らしていたある日、オーク軍の侵略により村は制圧され両親は兵士だったガニアンに殺された。

リオンは一人生き延び両親の仇討ちのため王国の騎士に志願したが、五年前の戦場で捕虜となり、ガニアンの性奴隷にされてしまった。

「それで、私の両親に何の用ですか？」

「なに、長いこと顔を出さなかった息子を心配しているかもしれないと思って、ぐふっふ、」

なぜ親を殺した張本人を連れてこなくてはいけないのかと億劫になりつつ、逆らうという思考は既に奪われていたのでリオンは素直にガニアンを両親の墓へ連れてきた。

「さぁ、お前の親に見せてやれ。自分達を殺した男の牝豚奴隷になった姿をな！」

「っ、このっ外道、どこまで人を貶めればっうう？　やめろ、放せ！」

背後から抱きすくめられ、リオンの顎を掴んで横へと向けた。その拍子に帽子が地面へ落ち、美麗ながらもどこか幼い顔立ちが露になる。色白の肌には薄らと赤み

があり、紺碧色の大きく丸い双眸は湖のようで、唇は苺のような愛らしい桃色でふっくらとしている。
「主人に逆らうつもりか？」
「ひっ」
隻眼に睨まれ怯んでしまう。
五年間の隷属生活でガニアンに対してリオンは、絶対服従が根付いてしまっている。
「んぐ？！」
リオンはいきなりのキスに戸惑う。
キスというより、唇へ吸い尽いているだけのようなものだ。ジタバタを暴れるが、顎を掴まれたままビクともしない。互いの口が癒着したよう離れない。
「うぐ、ぶぅ、んぶあ！」
酸素不足で鼻穴が激しく開閉する。それでも暴れることを止めない性奴隷の髪の毛を主人の野太い指が手櫛で掬う。途端にリオンは動かなくなり、頬がいっそう紅く染まり、無意識に目を閉じて強張っていた表情が緩んだ。
「俺の牝だという自覚で出てきたか？」
「んぅう、ふぐぅううう♥」
ブシュルルッ。
舌が捻じ込まれ唾液を飲まされるとリオンの瞳が瞼の裏に半分隠れ、股間からは湿った音が鳴った。

「んちゅ、眠っている大事な親に見せてやれ。キスだけでザーメン噴き出す息子の姿をな」
「ふへぇ、らめぇ、やだぁ……♥　み、みせたくらぃ……やだぁ♥」
顎を掴んでいたガニアンの手がスカートに手をかける。黒い服から真っ白な肌が露になった。
小さなショーツに収まりきらない陰嚢が股間から顔を出し、陰茎が勃起して形が浮き彫りになり、亀頭がわずかにはみ出してスカートの裏地が白濁液で濡れている。
「顔も知らないエルフ共、お前らの息子はキスだけでチ×ポ勃起してザーメン噴き出す淫乱牝豚で元気にしているぞ！　ぐふ、ぐふふっ！」
「んちゅ、うんんぐ！」
やめろと言いたげに首を少しだけ振る。顎からガニアンの手は離れているのに、唇をくっつけたまま凌辱者の腟内を貪る。
(おおっ、キスきもひぃぃ♥　御主人様の唾液おいひぃぃい、もっと、もっとぉ！)
「んちゅ、ねろぉ、ぅう」
「積極的だな、ン」
リオンの手はガニアンの頭へ縋りつき、食べてしまいそうな勢いで唇をパクパクと動かしている。赤い舌が蛇のよう絡み合い、両者の口からは唾液が零れて服を汚していく。
「んぶ、うぶっ、っぅぶううう♥」
ドビュ、ドッビュドブルルルルルル！！！

墓に見せつけていた陰茎から白濁が飛び出し、またスカートの裏地に飛び散った。リオンは余韻を味わうぼんやりとした表情を仇に見せた。
「キスだけで射精するぐらい元気なお前の姿に親も嬉しいだろうな、ぐふふ、ぐふ」
「……ぁあ」
ガニアンのスーツに皺ができるほど握りしめ、恨めしく主人を睨み上げながらも切なげに下唇を舐めてキスを強請る。
「お前は親の前で、親の仇に媚いるのだぞ」
「らめぇ、きもひぃ、牝豚の口マ×コどろどろらんれひゅ」
「ぐふふどうしようもない淫乱さだな、牝豚」
直接耳元で「牝豚」と呼ばれ被虐快感に、鼓膜から脳髄までドロドロに蕩けた錯覚がした。
主人の好みで伸ばした金髪を手櫛で梳かされながら尖った耳の先を軽く噛まれると、腹の奥がキュンキュンと疼いた。
「にしても汚れた墓だ」
長いこと誰も来ていない墓は手入されていないので汚れている。墓を見ながらガニアンが気味悪く笑う。
「親孝行代わりにお前が掃除してやれ、ザーメンミルクでな」
「ひ、酷い、やだ、やだぁああ」
「今日は一段と命令に背こうとするな、また躾けが必要か？」
「あ、そ、それだけは、躾だけは！」

リオンの顔色が真っ青に強張り涙目で首を振った。騎士だった頃に性奴隷にさせられるために受けた躾は、五年経った今でもリオンの心を揺さぶるのに強烈で過酷な責めだった。
「ならば、自らの手でスカートを持ち上げろ」
「は、はぃ、ぅうん♥」
両親に見せつけるよう喪服のロングスカートをたくし上げ、ショーツからはみ出している巨根花芯を墓の前に曝してしまう。
ショーツごと、ガニアンの手に花芯を握られた。握力の強弱と布の擦れ、射精したばかりで過敏になっている。
グジュ、ヌチュ、クチュヌチュクチュ……。
「やめ、やだ、やだぁあ、あああ♥」
泣きじゃくりながらも目は蕩け焦点を失っている。ガニアンの手コキに合わせて腰を振り、ニチュニチュと湿った音が鳴る。尿道からはカウパー液がひっきりなしに垂れ流れだす。ムクムクと陰茎がさらに勃起し、幼い顔立ちとアンバランスな凶器じみた巨根へと変貌した。
「このブツだったら、どんな女でも一発受精だろうに、女のマ×コじゃなくてただの空撃ちだから残念だ、お前の家系はこれで末代だろうな。いや、俺と結婚して子供を産めば末代ではないか……どうだリオン、俺と結婚しないか？」
「はぁ、あひぃ♥　め、牝豚になっへもぉ、結婚だけはしな、い、しません！　っああ！」

「相変わらずコレだけは強情だな、またフラれてしまった」
心身ともに堕落したリオンだが、ガニアンとの結婚は必ず拒否してた。それをガニアンは怒るわけでもなく、むしろ何時までリオンが拒絶しつづけるか楽しんでいる。
「お前は雁首を握られると弱ぃな」
「はぁうう、ふぁあ！」
リオンの真っ赤な耳が激しく上下へ揺れ動き、手コキに合わせる腰の前後運動は増々激しさを増して、ガニアンの窄めた掌の中に肉棒を突き出すたびにブチュン！ブチュン！　と激しい音を奏でる。
「はひ、ひぃい、くる、きひゃううう、きへひまぅぅうう！　らめぇ、これ、これらけはぁあ♥」
「ぐふふ、自分から腰振っている自覚がないのか牝豚」
グヂュヌヂュヌヂュヌチュヌチュ……。
カウパーの量と粘り気が強くなり、陰茎から墓石まで幾つもの糸が途切れることなく垂れ下がる。
「ちゃんといつも通り大声で鳴けよ」
「ふぎいいい♥　やべ、やべぇええ、こ、こんなの、やだ、ゆる、ゆるひてくだひやぃいぃい！」
「そら、ザーメン洗浄だ！」
「んぐ、ぐぅうう！」

限界寸前の張り詰めた陰茎を搾るよう撫で回され、快感に腰が大きく跳ね、根元の奥から白濁のマグマが競りあがるが――

「っぐぅうう！」

「おお、射精放尿好きの牝豚が我慢を覚えたか」

親の墓を穢すことに耐えられなかったリオンは射精欲求を抑えつけた。射精を我慢した反動でスカートを持っている腕は震え、瞼と長耳が痙攣している。

「淫乱がよく耐えたものだな、しかしこれならどうだ？　ン」

「ング、んちゅぅ」

顎を掴まれ唾液たっぷりのディープキス。頬が膨らむほどの大量の唾液を飲まされ、男根のようにガニアンの肉厚な舌が、出し入れを繰り返す。唇を微弱に吸われながら、ジュボジュボと舌が喉元近くまで滑り込み獣臭い唾液が歯茎の裏に塗りたくられる。

「ふぐぐ、口まで性感帯にされた牝豚には堪らないだろ？　ンジュ、ヂュル！」

「んぐ、ふぐぅうう！　ふぃふぇえええええ！」

股間の急所と開発されきった腟内を同時に嬲られる快感に、紺碧の双眸が大きく見開いて、すぐさま瞼の裏へ瞳孔が半分隠れた。

口の熱が電流のような激しさを伴って下っていき、腰が甘く砕け我慢した熱が一気に爆発した。

「んぶ、ら、らめぇ、しちゃらめぇえええええ！」

ドブ、ドブブブビュブブブビュブブ！！！

巨根に相応しい、相当の量の白濁液がベチャベチャと芝に埋め込まれた墓に降り注ぐ。オークに負けず劣らずの濃厚な精液がリットル単位で尿道を駆け抜けていき、眩い快感に表情がだらしないアへ顔になってしまう。
「いぐ、いぐぅううううう♥　牝豚おち×ぽミルクだしでぃぐぅうううう♥　ひっぃいいい♥　イクイクイクイクゥウウウウウ！！！　牝豚リオンいぎまひゅぅウううう！　おち×ぽシャワーぶしゃあああしまひゅぅうううう♥♥♥」
ガクガク、ガクガクゥ！　ガクゥッガクゥッ！
蟹股で痙攣しながら背が反り返る。白濁量は止まらないどころか量を増やしていき、無残にも墓は白濁塗れになり周囲へ悪臭を放つ。
「ぉごおおお♥　オチ×ポとまらにゃぃイいいい！　イヤ、イヤらのにイいい！　お、ほぉおおお！　ザーメンまだまだでてくりゅ？！　もうやめで、やめでぇええええ！　母ひゃんと父ひゃんをよごひひゃらめぇえええ！　うごめんなはイ、ごめんなひゃいい、オチ×ポアクメに弱くてごめんなさぃイいい！　あひィ♥」
「これで少しはマシな墓になるだろう、ぐふふっ、ぐふ」
両手を痙攣させながらもスカートはたくし上げたまま、腰を前へ突き出し精液をダバダバと垂れ流しつづけた。
「はひぃいいい♥　どまらにゃいぃいいい〃い〃い〃い！　もうどまってぇえええ、オチ×ポアぐメぇどまってぇ♥♥♥」
「まだだ、もっと醜態を曝せ」
「んぶぅううう？！！」

ガニアンが自分の右指をベロリと舐めると、人差し指と中指がリオンの腟内へ入れた。異常なほど敏感な腟内は主の指に興奮し、すぐさま大量の涎を分泌し指に舌を巻いて舐めはじめる。

「お前の大好物の涎と手汗つきだぞ、ぐふふ」

「んぶぅうう♥　じゅぶぅうう♥　ジュゾゾ！」

背後からの密着がさらに増し、左腕だけで体を絞めつけられながら右指が陰茎のよう腟内挿入をひたすらつづけた。

ジョボ、ジョボボボボォオブジュウウウウウ！！！

射精の止まらない尿道は水っぽい白濁液を出しはじめた。

粘っこいリオンのザーメンが墓石へ蔓のよう絡みついているのでイカ臭をさらに酷く醸しださせ、両親の名前が彫られた文字の溝に水っぽいザーメンが留まってしまう。

「ぐふ、ぐふふっふふ！　牝豚、大事な親の眠る大事な墓穢しながらションベンザーメン垂らしてイクのはどんな気分だ⁉」

「んぐぶぅうううう♥　ごろびびひゅべぇえええ！！！　ふぎゅううぃぃい！」

快楽と自責の板挟みにされながら、そのまま一時間もリオンは親の墓へザーメンを吐き出しつづけた。

・・・・・

# 宝玉奴麗天女

「みろ、極上の宝石が二つも手に入ったぞ」
龍と獅子の血を引く獣人皇帝、ランドラが己の兵士たちの前に見せつける。ランドラが引っ張ってきたのは、首輪と手枷を嵌められ鎖を繋げられた人間の皇族父子。獣人兵が欲望滾る眼力で父子をねめつける。
父親は、濃紺の髪と瑠璃を嵌め込んだような双眸の、穏やかな気質の天玉皇国を治める帝の知雨・オルドナ
息子は紅蓮の髪に紅色の瞳、敵兵に囲まれながらも怖気ず睨みつける気性が激しい第一皇子の紅蓮・オルドナ
「ランドラ皇帝、なぜこのような……」
「なぜ？　余が欲しかったから先に奪われないようにしたまでだ！　この国の豊かな資源も美しい天女もな」
天玉皇国──遥か大昔、痩せた土地で飢える人々を哀れに思った、浄瑠璃と玉麗という天女の姉妹が舞い降りた。
浄瑠璃の流す涙は水晶となり、玉麗の血はルビーとなり宝石が土地に溢れ、それを資源として国を潤し宝飾の国として栄えた。それだけでなく天女の血を引くと言われる皇国の民はみな美しい。可憐な顔立ちが多く、特に皇族の知雨と紅蓮は「夢物語から現れた天女」だと言われるほど美しく可憐な容姿をしていた。
どの国も喉から手がでるほど、この豊かで美しい国を手に入れたいと思っていた。
それを獣人皇帝は実現させたのだ。
「なに、皇族貴族以外の国民たちも宝石のよう美しい容姿ばかり、悪いようにはし

ない。我が国はむさくるしいオスばかりだからな、可憐な愛玩たちだ丁寧に扱ってやる」

獣人が住まうグラウン大国。高い軍事力を誇る傭兵国家であり、近年では多くの国に戦争を仕掛け次々と広大な領土と資源を手に入れて急激に発展していってい る。女の獣人はあまりおらず国の殆どは男ばかり、他国の娘を攫い嫁にする習性があり多くの国が悩まされてもいた。

「だからコヤツを信用してはならぬとおっしゃったのです！」

紅蓮が歯を剥き出しにして唸り怒る。

「この野獣が父上にふしだらな視線をいつも向けていると、どれだけ警告したか！」

「捕まったというのに随分と元気な皇子様だ」

「黙れ獣風情が！」

皇子の迫力ある怒気に兵士がたじろぐ。しかしランドラは余裕たっぷりに紅蓮の顎を掴み上げニヤニヤと嗤いかける。

「今からお前は野獣の家畜になるのだ牡に媚びへつらい、尻壺に獣精を注がれ悦ぶ美しくも低俗なメスに生まれ変わるのだ」

「誰がそんなモノに成り下がるか！」

「紅蓮、やめなさい」

今にも飛び掛かりそうな息子を抑えつけ抱きしめ、小声で諭す。

「いつか必ずチャンスがきます、それまで今は耐えるのです」

「ぐっ……」

美しい父子を、目で犯しながら龍獅子皇帝は股間を熱く滾らせていた。既に頭の中は二人の天女を堕落させ辱しめ支配することで一杯だ。
「さて、どちらの宝石を先に愛いでるべきか」
そしてランドラが思い描く未来通り、知雨と紅蓮は獣の手に堕ちていった。

・・・・・

半年後、クラウン大国の城では婚礼と戴冠式がおこなわれた。
近隣国からの来賓客が見守る中、花嫁衣裳に身を包んだ知雨と華美なドレス姿の紅蓮が、王座に腰掛けるランドラ皇帝に恭しく頭をさげた。
天女とまで言われた美しい皇族親子を手に入れた龍獅子に誰もが羨望の眼差しを向ける。
「クラウン大国の妃と姫として生まれ変わり、わが皇帝陛下に仕えることを誓うか？」
「はいこれからはクラウン大国を祖国とし、皇帝陛下に忠誠を、妃として生まれ変わる証に知雨ではなく、浄瑠璃と」
「――……玉麗と」
「名乗ることを我が皇帝陛下に」
「お父様に」
「「誓います」」

「それだけか？」
皇帝の言葉に隷属親子は顔を見合わせる。
浄瑠璃となった知雨は頬を赤らめながら目を伏せ、玉麗となった紅蓮は一度身を震わせ、二人揃って熱い息を吐いてから言葉を紡ぎだす。
「皇帝陛下及び逞しく雄々しい獣人の殿方に沢山種付けされて、丈夫で美しい獣の子を孕んで産む牝王妃として」
「お父様と逞しく雄々しい獣人の殿方を悦ばす愛玩雌姫として」
「「精一杯ご奉仕させて頂きます」」
頭をさげる二人の顔は歪んでいる。そして鼻息荒く肩が小刻みに激しく上下していた。涎を垂らし、失禁したように股間と臀部が湿っているのが誰の目にも映った。
ブッボブッビュゥウウ！
厳かな空間をブチ壊す下品な音が妃と姫から鳴り響いた。
「はぁああっくぅうう！」
「ハッハッ！　はぁあああっ！」
親子そろって床に手をつき、瞳が明後日の方向を見ながら尻を突き出し床を舐める。
「やれやれ、堪え性のない妻と子だ」
苦笑いをしながらランドラが王座を立ち、二人の傍まで行くと思い切り二人の臀部を叩いた。
ズパァアアアン！

「「っぉおおおっホッ♥」」
　浄瑠璃と玉麗は鈍痛快美にうっとりと恍惚に顔を染めて、尻文字を描いて皇帝を誘う。
「ほっぉおおっ♥　ごめんらひゃい、ごめんらひゃいあらたァああ、おひり叩かれていく淫乱妻でごめんらひゃいぃい♥」
「アあぁっらめぇえ、おひりぃい、おひりぺんぺんはらめぇえええ♥♥♥」
「誘ってきたのは其方だろ？　相変わらず叩き甲斐のある尻よな！」
パァアアン！　パァアアアン！　パァアアアン！　ズッパァアアアン！
小気味良い弾力音と艶やかな悲鳴が謁見場に響きわたる。
「はは、凄い……まるで打楽器のようだ」
「見えますか、叩かれて揺れる尻が」
来賓たちは下劣な欲望を掻き立てられ、何度も生唾を飲んだ。
鼻水垂らして泣きじゃくる父子に王族としての誇りも威厳もなく、龍獅子皇帝の思うがまま泣き乱れる。
「どれ、客人たちにも見せてみたらどうだ」
　皇帝が二人のドレスを捲る。真っ赤に腫れあがった巨尻と桃尻の谷間からは極太バイブが飛び出し稼働している。回転していたと思えば、左右へ揺れ動き、次には前後へ動き、苛烈な回転運動で腸粘膜をかき乱す。
　ブブブブ、ヴィィイイイン、ヴィィイイイイン。
「いぐ、いぐいぐっぅううううほぉおお？！　いってないろにいってりゅぅうう、

# 魔法少年ハ愛デ敗北スル

「きゃぁあああああああ！」
賑やかな街から外れた、路地裏の行き止まり。甲高い女性の悲鳴が上がる。女性の眼前、大きな蝙蝠羽をひろげた紅い目と鋭い牙を生やした異形の生き物がにじりよってくる。
「グゲゲ、ヨコセ。心ヲヨコセ」
異形が女性を射抜き、キラリと紅色の目が輝きだす。すると恐怖に涙していた女性から表情が消え、瞳の光が抜け落ちて地面に座り込んでしまう。異形は満足気に笑い、虚ろな女性に近づくと胸の中心へ腕を伸ばした。
真っ黒な腕は、肉体へ波紋をひろげながら貫通してしまう。女性の体から血も臓物も飛び出ることはない。腕が放されると女性は気絶し倒れ込んだ。
異形の手には、水晶玉が握られていた。
「グゲ、種、入レル。同胞増ヤス」
異形の片方には真っ黒な種を手にして、グイグイと水晶玉に押しつけていたが

―――

「スプラッシュパ―ル！」
頭上からかの声と共に、四方八方へ白い光の粒が飛び散ってきた。光の粒に衝突した黒い種は割れて消滅してしまう。
「ギギ、貴様ハ……！」
逆光を浴びながら、跳躍し異形と対峙したのは純白のドレスコスチュームに白いグローブ、ロングブーツを身に纏った可憐な少女であった。コスチュームに対比す

るよう紅蓮の長い髪を風に靡かせ、ルビーのような輝く目で異形を睨む。
「せっかくのパパとの映画デートだったのに邪魔してくれたわね、この×××悪魔野郎！　天聖戦士、魔法少年ペルラがぶっ潰してやるんだから！」
可憐な見た目にそぐわぬ暴言を吐きながら魔法少女もとい魔法少年は、水晶と真珠で彩られたロッドを向ける。
「その女性の心を返してもらうわ！　〝白き波動（ホワイト・ウェーブ）〟」
ロッドの水晶から、眩いほどの光が波の形をもって流れてくる。悪魔と言われた異形は、光の波を受けて苦しみだす。
「ウギャァイイイィイイ！」
頭を振り乱しもがく異形の手から、水晶玉が零れてしまうが意思でもあるよう気絶している女性の肉体へ飛んで戻っていった。
「とどめよ！　どりゃぁあああ！！！　魔界まで吹き飛べ！」
ペルラと名乗った魔法少年が跳躍し悪魔へ突進していく。
ロッドを握っていない左手が拳をつくり、勢いよく悪魔の顔面にめりこみ、異形の存在は彼方へ吹き飛び悪魔は空中で爆散。
「はっ、一昨日きやがれっての！」
「ん、んぅ……」
「あ、やべ」
女性が起きそうな気配に、慌ててパルラは走り去っていく。
「ん……あれ？　私どうしてこんなところに？」

目が覚めた女性はなぜこんな所で倒れていたのかすっかり忘れていた。

・・・・・

「まったく、折角のパパとのデートに水を差すなっての！　早く戻んないと」

路地裏を走るペルラ。白で統一されたコスチュームが淡い光に包まれながら白色のリボンと変化し、逆再生のよう胸元のブローチへ戻っていく。

変身を解いた姿は紅い髪をポニーテールで纏めた活発そうな女の子の服装をした少年だ。

「……ん？」

（視線？）

一度立ち止まるが一方通行の狭い路地裏には誰もいない。

「気のせい、か」

——ビルよりも高い場所から一連の様子を見ていた者がいることを、ペルラは知らない。

異形の生き物——悪魔

彼らは魔界から人間界へ静かに侵略し始めた。

人の魂を司る——心の結晶を引き抜き、結晶に「悪魔の種」という人から魔族へ転化してしまう代物を植え込み、同胞達を増やそうとしているのだ。

同胞を増やした悪魔達は、人間界どころか天界を征服し支配するつもりだ。それを阻止するために、天界側も選りすぐりの天使を人間へ転生させ、悪魔達へ対抗させていた。
ペルラ――珠土蓮華もその一人である。
神の命により、天使から人間へ転生し日常に潜む悪魔達を日夜倒していっている。
普段は人間の少年として暮らしているが、いざという時には天聖戦士として戦う戦士であった。

……

「パパぁ、お待たせ～」
映画館出入り口で待つ男性――父親の珠土悟志へ、変身解除した蓮華が駆け寄り腕を組む。
「ひっつくな、あとどんだけ化粧直しに時間かけてんだよ」
「やぁね、化粧は女の嗜みよ」
「………お前は男だろ」
たまたま二人の会話を耳にした他人がギョッとし、蓮華を見てしまう。
真紅の髪をフリルのゴムでポニーテールにまとめ、顔はほんのりと化粧を施し、真珠をあしらったブローチ（これは変身道具だが）も服装も何処からどう見ても女の子であった。

天使が転生したさい、人間の夫婦から生まれ見た目は人の子として産まれ、ある程度時が立つと使命と力に目覚め闘う戦士になる。
しかし戦士に目覚める前の生活環境で多大な影響も受ける。
蓮華は魔法少女や戦う女の子戦士のアニメに幼い頃ドハマりしてしまい、そこから可愛いものや女の子の服装へ興味が行き、戦闘コスチュームも魔法少女な出で立ちになってしまったのだ。
そのまま街中を歩く親子二人を多くの人々が二度見した。
一人は可愛らしい少女（の服を着た少年）、もう片方は眉間に皺が寄り不愛想ながらも顔立ちの整った三十代男性。親子だと知らない人からするとなんだか怪しい。
そして職務質問に三度遭遇する羽目になった。
「だからお前と街中歩くのは嫌なんだよ」
「僕はパパとの久々のデートで嬉しい♥」
「だからその誤解を招く言いか……ん」
蓮華がむっと唇を噛む表情は見ないフリして悟志がポケットからスマホを取り出し、耳に宛てた。
「俺だ。この前の件か、どうかしたか……そうか、あぁ、わかった今丁度オフィスの近くにいる、十分程度でつくはずだ」
それだけ言うと悟志は通話を切った。
「ちょっと今日久々のお休みデートじゃん！　僕と仕事どっちが大事なの！」
「面倒な女の台詞を吐くな。お前が飯食えるのは誰のおかげだ」

「僕が碌々家事もできない上にブラック労働でお疲れのパパに変わってやってあげてるおかでしょ？！！　僕がご飯食べれるのは、僕の手腕のおかげだね！」
「……っち。糞ガキが」
舌打ちする悟志に関係のない通りすがりの人々が肩を震わせる。蓮華は慣れているのか怖がってはいない、ただ般若の如くキレてはいる。
「パパこの前も、その前とその前の前の前も約束すっぽかしたじゃん！」
「仕事だからな。お前今日はもう帰れ」
「パパの馬鹿！　離婚だ、離婚してやる」
「おいやめろ！　職質されるようなことを吐くな！！！」
「だって……」
俯く蓮華に頭をガシガシ掻きながら悟志は深い溜息をつく。
「蓮華」
「なに、ン」
いきなり抱き寄せられ、次に軽いリップ音と温かな感触が額から聞こえた。
「え、あ、パ」
「じゃぁな、暗くなる前に帰れよ」
それだけ言うとあっさり背を向けてしまう父親は雑多な人混みを歩いていく。
「もう、キスすれば機嫌が治ると思って……ん？！」
胸元の真珠ブローチが光っている。悪魔が近くに現れたサインだ。
「またこの近く？」

輝くブローチを握り絞め、蓮華は訝しげる。
悪魔達は日々あらゆる場所へ出没し人々を襲うが、短時間で、しかも同胞が倒された周辺で現れるのは今までなかったことだ。
「いいわ、パパと平和に暮らす未来のためにも魔界の奴等なんてぶっ殺リン☆　してやるわ」
ブローチを頼りに、蓮華は悪魔が出没した場所へ走っていく。

・・・・・・

反応があったのは駅近くの地下駐車場だった。
変身し、気配を決して薄暗い駐車場へ入って行ったが車だけが止まっており、悪魔どころか人もいない。
「あれ？　おかしいわね」
(それでも罠かもしれないからね、慎重に……)
耳を集中させても悪魔らしき声や足音、羽の羽ばたきは聞こえない。
駐車場内を見て回る。地下にはブーツの音だけが地下に反響した。
「なぁに、ブローチって故障するの？」
隅から隅まで歩き回り、やはり悪魔どころか人もいなのでブローチを疑い始めた頃だ。
ブジュ、ブニュゥ。

背後から柔らかく粘着質な音が響いてきた。すぐさまロッドを構え振り向く。
「やっとおでまし、え、えええ？　スライム……なの？」
粘液生物——スライム。悪魔の使い魔であり、魔界の生き物だ。今まで見たことあるのは、青色と赤色の個体だ。青は物理に弱いが魔法に強く、赤は魔法に弱いが、物理はほぼ効かない。
蓮華の目の前に現れたのは、青でも赤でもない紫色のスライムだった。
(物理に弱いのか、魔法に弱いのか……それとも両方に耐性がある？)
魔界の生き物は触れるだけで毒を付与してくる厄介な生物もいるのだ、迂闊に攻撃はできない。
蓮華が攻撃してこないのをいいことに、紫スライムが飛びかかってくる。寸前で躱すが、今度は背後から波のよううねり襲ってくる。ロッドを振るういスプラッシュパールで蹴散らすも、飛び散ったスライムはもとに戻り一定距離を保って此方を伺っている。
「魔法は効かないタイプなのね……だったら物理ってことかしら、ね！」
拳をつくる、次に襲い掛かるスライムへ打撃を喰らわす算段であった。
再び飛びかかってくるスライムへ、自ら飛び込み拳を粘液体の中へ食らわすと、
「んひっ？！！」
——グローブに包まれた指に触れただけで肩が大きく跳ねた。
指先から鋭い熱が全身に行き渡り、特に腰を強かに貫いた。お腹の奥がどうしようもなく疼き気を取られてしまう。

（な、なにいまの？　まさか毒性があるスライムぅ、んあぁああぁ？！！）
　驚いている間に、スライムがグローブごと指から手首までズブズブと呑みこんでいく。その度に蓮華の全身に怪しい熱波が行き渡り、骨盤が溶けてしまいそうな衝撃が襲い掛かってきた。
「や、なんなのこれぇ？　んひぃいいいいいいいいい！！！」
　指先ばかりを気にしている間に、純白のブーツへも紫スライムが忍び寄って来た。ズルズルと這い上がり、ブーツに包まれた足にも雪崩れ込んでくる。
　脚からにじり寄ったスライムが、スカートの中へ入り込み、股間全体をショーツ一枚隔ててバイブレショーンを起こして刺激してきた。
　ヴブブブブ！！！
「あきゃぁああああああああああああぁ？！！」
　ムリヤリ引き出される快感。足腰から力が抜け冷たい床へ尻餅ついてしまう。その間も触手の動きは止まらず、股間へ振動を伝えてきた。慎ましく収まっていた花芯が熱を帯び血流が集まりムクムクと起き上がりはじめる。布一枚隔てて擽られる排泄孔がもどかしさを覚えてしまう。
「嫌ぁ、なんなのこいつらぁ……やめてぇ」
　薔薇色の頬がさらに赤みを増し、紅玉色の瞳が潤む。
（このスライム、性的な感度を高める効果があるんだわ……うぅ）
「何とかしないと……」
　蓮華の中で一つ避けたいことがあった。

逃げ出したいが、尻餅をついたままの状態でスライムに下半身を固められ動きを封じられている。いつもなら魔法で蹴散らすが、グローブやブーツの中へ侵入したスライムに、指をチュパチュパしゃぶれるだけで快感が走り集中力が乱れ魔力が練れない。しかも股間へのバイブブレーションに腰が砕けてしまって体に力も入らない。

「はぁ……んっ」

（あぁ、早くしないと理性が……）

男の急所へ心地よい振動を延々押しつけられて、思考が桃色に霞だしてきた。腹の疼きが身体中へ行き渡り飢えに似た衝動が湧き上がる。

「淫魔の属性を持つスライムは気に入って頂けたかな？」

突然の声に急に総毛立ち、体が縮みあがった。顔を上げれば悪魔が一体、此方へ近づいてきている。

「こ、この魔力は……アバリシア！」

「ご名答、久しぶりだな」

成人男性より少し背が高く真っ黒で強靭な体躯。左右のコメカミには山羊の角を持ち、目は血のように赤く、額にも第三の目を持っている。背中には大きな蝙蝠翼、しなやかな尻尾を持った悪魔。

他の魔物や悪魔では比べ程にならない強さと魔力を持ち多くの転聖戦士達が苦

渋を飲まされてきた、最強の悪魔――アバリシア。
「中々の絶景じゃないか」
「ひやぁあああ！」
片足首を掴まれスカートの中を覗かれる。ショーツから僅かにはみ出た陰茎は硬くなりつつあり、白い布に染みを作っていた。
「覗くな！」
「そう言われてもな」
真っ赤な顔の魔法少年と反対に悪魔は薄ら笑いを浮かべている。尻尾が伸び、ショーツ越しに尻の谷間へ這い先端が排泄孔を突く。
「え、ちょっと！　何するつもりなんだよ、やめろ！　ばかぁ！」
最悪な予想にどっと汗が噴き出てしまう。
(ダメダメダメ！　お尻は絶対ダメ！！！)
なんとかスライムから逃げようとがむしゃらに手を伸ばすが動かす度に体へ淫らな熱が広がり上手く力が入らない。
「あふぅん、いやぁくるなぁ……」
蓮華の邪魔をし、一層激しくグチュグチュと股間の間を行き来するスライム達。コスチュームの繊維を通り抜けスライムに胸の頂を揉まれ、股間の中心が弄られる。スライムの海から逃げようとするが絡みついた粘液は振り払えず、体へ余計な熱を取り込んでしまうだけだった。
アバリシアの手でスカートが捲られ、ショーツがずらされる。悪魔の尻尾が肛門

皺へスライムを練り込みながらヒダの一枚一枚を丁寧に解していく。
　皺に触れるだけで蓮華は肩がビクビク震わせ、腰のくびれが揺れた。
（あぁ……我慢できないぃ……）
「あぁ……ふあぁあ……ダメぇ♥」
「だろうな、淫乱天使」
ルビーの目が赤く潤ませながら吐息を漏らす魔法少年の表情に、悪魔が顎をしゃくりながら眺める。
尻尾は執拗に菊皺をほぐし菊華が綻び小さな穴が開いた。
（いやぁ、ばれちゃう、コイツにばれちゃう！）
　諦めきれない蓮華は媚薬粘液の中で手足をばたつかせる。潤んだ表情だが歯の根が合わずにカチカチと鳴り、背中は冷や汗でビチャビチャだ。
（耐えなきゃ、耐えてみせる！　こんな変態悪魔なんかに負けるか！）
　襲い掛かる衝撃に耐えようと目を強く瞑り、スライムまみれのグローブをギュッと握った。
「挿れるぞ」
　アバリシアがくびれを掴み、慎ましやかな肛門孔めがけて尻尾を宛がう。
　ズブゥウウゥウウゥゥッ！！！
「ン、ンおっほっぉ、おおおおおおおおお？！！　――――っっぁあああぁ♥」
　媚薬スライムを絡ませた尻尾が、腸ヒダへ硬い皮膚を擦りつつけ、ぐんぐん伸びて奥へと進んでいく。細い異物は圧迫感を与えつつも内臓へ傷を付ける事もない。

細いが長く硬い尻尾は、大腸内を征服し一旦動きを止めた。征服される屈辱と排泄とは真逆の違和感、排泄器官を支配された証の圧迫感。
　天聖戦士の誇りも矜持も呆気なく砕け散った。無残に散り、踏み潰されたことにゾゾゾと背筋がわななく。
「やはりな」
　再び意味深げに一人呟くと、アバリシアは尻尾を動かし始めた。腸内で少ずつ、尻尾が律動していく。媚薬スライムで腸壁を磨き丹念に腸粘膜を混ぜ合わせる。段々と尻尾の動きは加速していき、結合箇所からジュブジュブとはしたない水音が地下駐車場に大きく響いた。
「っぁあああぬいへぇ、この尻尾ぬいへよォ(かお)おおお♥　ほぉああああぁ♥♥♥」
「まったく嫌そうな声ではないし、いい表情をしているな。もっと良くしてやるよ」
　腰を掴んでいいた手が、スライム沼から蓮華を抱き上げる。突然の浮遊感に思わず、魔法戦士は敵の二の腕にしがみついてしまった。
「なんだ、甘えているのか」
「へ、変なこと言うなぁ、ふぁ……！」
(敵なのに、倒さなきゃいけないのに、なんで……？)
　性的興奮とは別に心臓が煩い。アバリシアと密着してから耳や首筋にかかる息に体が跳ねて、視線に胸が高鳴っていく。
(こいつはパパじゃないし、侵略者なのに……しっかりしてよ僕！)

「随分と可愛い顔をするな」
「っ、だからぁ変なこと言うなぁあ！！！」
「なら行為に集中させてもらうとするか」
ブジュゥ、ジュブゥ！　ズリズリ、ブジュゥウゥウゥウ！！
長大なピストン運動、硬い尻尾が抜けていくとグズグズと尾骨から背骨が蕩けていってしまうような熱が広がりもう堪らない。可憐な唇を開きっ放しでただ甘い声をだした。
「ンァあああっ♥　ほぉおおおぅ♥♥♥」
「……おい、まさか本当に尻穴犯された経験でもあるのか」
耳元で囁かれる低い声に鼓膜がこれでもかと震え、脳内中枢核が犯される。
「あるわけぇ、ないれひょぉおおお！　あんっ、やぁああ！」
「そうか」
尻穴快楽に夢中な魔法少年は気づいていないが、アバリシアの声音は弾でいた。目を細め、悪魔は少年のうなじへ舌を這わせる。
ぶりぶびぃ、ブピィ。
ずるりと尻尾が後退していくと空気が混じり放屁じみた音がしてしまう。結合箇所からスライムと直腸汁が溢れ出し白ソックスに染みがつく。
肉同士の擦れあいで火がつきそうなほど激しく、尻尾を回転運動しながらどろどろの腸液を攪拌しながら特に前線腺のあたりを小突く。
「んひぃい、ひあぁあああああ♥　あ♥　あああっ♥」

尻が勝ってに宿敵の尻尾を絞めつけてしまう。密着が増すと摩擦度がさらに上がり、天井知らずに感度が上がっていく。小さなショーツからは、雄々しい陰茎が勃起しスカートの中で左右に揺れ動いていた。

「あっ♥　あぁああ！　くるぅ、きちゃうぅぅううう♥♥♥　いやぁ悪魔にイカされちゃうよぉおお！！！」

「イケ、イキ狂え！　……いつものよう激しくな」

ぐちゃぐちゃと何も考えられない頭に、アバリシアの言葉だけが強烈に響いてくる。

「イク、いっちゃうぅぅううおならしながらいっちゃうぅぅううううう！！！」

ぶっびゅ。ぶっしゅ、ぶっびゅぅうっ。ぶしゅるるぶっびゅう。

可憐なスカートから白濁の飛沫が飛び散り、己の純白コスチュームを白濁で穢してしまった。

四肢が脱力し、筋肉に力が入らない。汗とスライムで滑る体をアバリシアの腕に支えられてないと落下してしまうだろう。

「俺を見ろ」

「嫌、やめ……――」

巨大な手に顎を掴まれ強制的に魔眼を直視してしまう。

魔眼の真っ赤な光をみつめていると、ただでさえ働かない頭がぼんやりし意識が眠り、瞳から光が消えぼんやりと覇気のない表情になってしまう。

「屈服し、俺を受け入れろ」

「――――は、い」
大人しくなった蓮華へアバリシアの唇が重なる。巨大蛞蝓のような舌が腔内一杯に入り、悪魔の唾液を塗りたくられていく。
(ああ、いま、パパじゃない相手とキスしてる……いや、いやだ………)
しかしどれだけ気持ちは嫌でも、蓮華の意思で指一本も動かせない。
「んちゅ、ちゅう……パパ……」
光を失った紅玉色の瞳から一筋の涙が流れ、胸に飾られたブローチへ零れ落ちた……瞬間、ブローチからまぶしく膨大な光が溢れ出しスライムを蒸発させ、アバリシアの巨体を弾き飛ばす。コンクリの壁を幾つもぶち破り、壁へ激突した悪魔は胃液を吐いて咽た。
「調子にのるなぁ！！！　この変態野郎！」
魔法戦士の力が爆発的に跳ね上がった。精気のなかったはずの目は煌々と燃え上がり、魔力が背後で大きくうねり渦巻きそれに合わせ真紅のポニーテールが舞っている。歩く度にアスファルトにヒビがはいっていた。
「よくもよくもよくも！　乙女の唇を奪ったわね、このセクハラ悪魔！　テメーの罪は糞重いぞ！！！」
「貴様は男だし、乙女はテメーという二人称はつかわん。まぁ、いい。これで俺の知りたいことは知れた」
「殺す！」
弾丸の如く跳躍する蓮華。

光を纏った拳が悪魔の腹へめり込むと、胃の辺りが黒い粒子となり霧散。アバリシアの腹のど真ん中が空洞になった。
しかし悪魔は、薄ら笑いを浮かべそのまま無事な両腕でペルラを抱きしめ、額に軽いキスをしてきた。まさかの二度目のキス。蓮華が呆気に取られている間に地面に魔法陣が発動、そのまま蓮華を抱きしめ離さない。
（あり得ない、このキスの感触さっきの……）
不貞腐れた自分へ悟志が送った額へのキスと同じ感触だった。
「嘘、でしょ？！　パパ、なの！？？」
困惑に揺れる少年へ悪魔は何も言わずただ抱きしめつづける。
ついに転異魔法が発動し、地下駐車場は何事もなかったよう静まり返った。

……

天井の柄、カーテンの色、家具の位置、ベッドの感触何もかもが蓮華の知っているものばかり。蓮華は父親の寝室にいた。
気づけばベッドの上、コスチューム姿のままで座り込んでいた。
目の前には父親姿のアバリシアがいる。
「っ！　パパの体からでていけ、この悪魔！」
「何を勘違いしている？　俺は元々魔界の住人だぞ。お前ら天使は転生したが悪魔は人間に化けて、さも人間のよう家に住んで会社なり学校行って紛れ込んで

たんだよ」
「嘘だ」
蓮華の声はどこか震えて弱々しい。強く否定できない。
悟志――アバリシアが蓮華に覆いかぶさってくる。ベッドのスプリングがギシギシ唸る。近づいてくる見知った顔、こんな時だというのに頬が真っ赤になり心臓が早鐘を打つ。
右手と顎を掴まれキスをされた。父親との初めての唇同士のキス。
「うん、あむ……くちゅ」
かさついた唇に吸い付かれ、舌がゆっくりと歯と歯茎の裏を舐めていく。溢れるほど唾液が塗りたくられ口端から涎が垂れてしまう。
(あぁ、アバリシアとパパのキスの感触、やっぱり同じだ……)
「ちゅ、んちゅぅ……、んあ、いや、いや！」
足を蹴り、キスを拒むとアバリシアが離れた。
「嘘、嫌だ……パパが悪魔だなんて……」
「諦めて事実を受け入れろ、珠士悟志という人間は実在しない。アバリシアという悪魔の偽名だ。そして、俺とお前が親子だというのは紛れもない事実だ。――……お前が俺に欲情していたということもな」
「なっ！」
「お前のズリネタが俺のシャツだって知ってるぞ。パパ、パパ、言いながら猿みたく腰振りたくってケツに指まで突っ込んで激しくしてたよな」

「嫌！　嫌！　言わないで！　なんで知ってるの！　いやだぁ！　忘れて！　嫌だ言わないで！」

部屋に蓮華の悲鳴があがり、耳と頬が自分の髪色に負けないほど赤くなる。羞恥のあまり泣きだし首を振る息子の耳元で、これでもかと楽げにアバリシアは語りだす。

「残業で遅くなるって電話入れた後、俺の部屋――このベッドの上で抜いてるんだよな。パパ、パパ、パパっていつも可愛い声で俺のこと呼んでな。最近じゃ昼間でも我慢できずに学校のトイレで、わざわざ洋式の便座の上で蟹股開脚して抜いたこともあったよな？　あとアナルパールと太っい電動張り型の玩具持ってるだろ？　自室の勉強机の棚、一番下の奥に、で、こっちも俺が残業だからって帰りが遅い日は俺の部屋で抜いてな。そりゃ尻尾突っ込んでも感じるよな。だってほぼ毎日自分で尻穴開発してればな。さすがにあんだけ反応されると知らない間に彼氏でもできたのかって驚いたがな……」

秘密を暴露されたショックを受ける息子に、むしろ嬉々として囁くアバリシアはまさしく悪魔そのものだ。

「やだぁ、やめて！　何も言わないで！　嫌い、パパなんて嫌い！　大嫌い！」

枕に顔を埋め泣きじゃくりだした蓮華をアバリシアが覗きこみ、涙で顔に張りついた紅葉髪をゆっくり掻き分ける。

「泣くなよ。お前が心配で監視してたら、たまたま視ちまっただけなんだよ。お前の本能が悪魔と同じなだけだ、別に近親なんて魔界じゃ普通にあるコトだ気にする

な。むしろ俺と同じ血が流れているんだと実感して嬉しかったぜ」
「……僕が好きなのは、人間のパパだもん。悪魔のあんたじゃない！！！」
その言葉に一瞬、父親の顔が寂しげな表情に歪む。蓮華の心がズキンと痛むがほんの一秒ほどで元の無表情に戻った。
「なぁ、コッチに来いって蓮華」
優しい声で囁きながら耳を舐め、手はコスチューム越しに胸の蕾を軽く摘み上げた。
「いやあ、触らないでぇ……」
フニフニと摘まれながら、布で擦られる。刺されるような鋭い快感が乳首を貫き勝手に甘い溜息が漏れてしまう。
(胸触られただけで、腰が……)
海綿体に勢いよく血流が集まってくる。スカートを押し上げ、花芯は半分ほど勃起し蜜を垂らしてしまった。
父親の顔が近づき軽いリップ音が鮮明に聞こえた。
舌に唇を舐められてから、こじ開けられる。
「ん、ぶぅうう、はなへっんぶぅ、はなへ！」
「ん、なんだ？　大好きな父親とのキスは嫌か？」
何度も角度を変えてアバリシアはキスをしてくる。唇が重なるだけで腰が砕けてしまい、舌技を受けると抵抗しようとする意志がやんわりほぐされていく。
「ん、うんんん？！！」

父の唇が重なる何度目かの口づけ。ヌルついた舌が硬く閉じた口へ割って入り歯茎をなぞられると体の力が抜けていく。ジュルル！　唾液がこれでもかと啜られ、そのたびに気怠なり筋肉が重くなっていった。
今までにない感覚に目を見開き、アバリシアを睨めばニヤリと不愛想なはずの父親は笑っている。
(魔力が喰われてる！)
「お前の魔力、根こそぎ貰うぞ」
人の姿だというのに尻尾が現れ、再び排泄孔めがけて突き刺さる。
ずぶぶぅうう！
「～～ぁあああああ！」
深々と挿入された尻尾。背骨が痺れ腰が砕けてしまう。逆流してきた異物に腸全体が蠢きヒリだそうとするが、尻尾は我が物顔でピストン運動を繰り返す。
ぶぢゅ、ぬぢゅうう！　ズリュ、ズルルルウウルルルッッ！！！
「お、お、おほぉおおおおっぉおおほぉおおお！！！」
ガクガクと手足が痙攣し、結合した尻尾から仄かに白く淡い光が吸収されていく。
魔力が吸収される感覚は、大便をヒリ出す感覚と似ており排便快楽がとめどなく尻穴から脳天を駆けあがる。
「だめぇすっちゃだめぇええのぉぉほぉん！　突きながら、しゅっちゃらめぇえ！
僕の力ぁ、とらないでぇパパァ！！！」
ブジュルル！　ブッビュルルルルル！　ドッビュブルルル！

直腸汁が噴き出し、勃起した陰茎が触れてもいないのに射精した。
尻尾から魔力を吸われるたびに脱力感が強まり、ブビブビとはしたない音が止まらない。
「蓮、お前は悪魔側の存在だ。こっちへ来い」
「はぁ……ぜったい……パパに誘惑されたとしても、堕ちない。」
「そうか、それは――」
「ひっぅ♥」
ヌッポン！　尻尾が引き抜かれると菊皺に甘い電流が弾けた。
「嬲り甲斐がある」
アバリシアが召喚術を発動し、先ほどの特殊なスライムが詰め込まれた瓶を異空間から引っ張り出してきた。
空中で勝手に瓶の蓋が開き、ベチャベチャと媚薬スライムがふりかかっていく。
二度目のスライム漬けに、魔力を奪われた影響でコスチュームが簡単に溶かされて素肌を曝してしまう。淫魔の力を兼ね備えたスライムが素肌の上を動くだけで、汗が滲み、肌は紅くなる。
「はぁ……ん♥」
スライムと一緒に父の手が、蓮華を愛撫していく。これでもかと優しく溶かされ露になった肌を撫でられ、弄られていく。
「愛している」
「っ」

# 禁断領域

「発行日」　2018年　5月19日

「著者」　カルビ

「発行」　焼肉文庫

「Pixiv」　12050686

「Twitter」　@NiKuZiRu2022

「Mail」　karubidouzinn@gmail.com

「印刷所」　コミックモール

本書は成人向けです。18歳未満の方の目に

触れないようお願いいたします。